

探訪 チャレンジ企業 42

能登島と未来を共有して発展を続ける (有能登島ガラス工房：七尾市(能登鹿北商工会))

一 ひよつこり夢の島 — 能登島 —

今、「県下で最も活気に満ちあふれている地域はどこか」と問えば、「能登島」という答えが返ってきて不思議ではない。離島であることがかえって幸いして、バブルの被害を被ることなく、豊かな自然と人情が温存されてきた。バブルがはじめて、人々が本物を求めだした時期に丁度合わせるが如く、二つの橋が開通し、また無料化されて、落ち着いた雰囲気のもとで、人間味あふれる真の開発が進行したのである。



その中核をなすのが、一つは「水族館」であり、もう一つは「ガラス美術館」と「ガラス工房」。「交流市場」によって構成される「ガラス関係の諸施設」である。NHKの「ひよつこりひよつたん島」にヒントを得た「ひよつこり能登島」を愛称として、夢の島実現を目指し、全住民が一体となつて努力を重ねてきた結果が今、大きな実を結びつつある。

二 (有)能登島ガラス工房 の創業

昭和五十七年、能登島大橋開通と期を一にして、ガラス工房が誘致された。当初は「東京ガラス工芸所」の支所として、廃校となった旧小学校の校舎を利用して開業したが、まもなく「(有)能登島ガラス工房」として独立した。社長はガラス工芸界では研究者・評論家として有名な由水常雄氏である。

もともと能登島は半農半漁の町であったが「自立した経済」を目標として「観光立町」の

スローガンを掲げ、その一環として工芸産地、なかでも県下では類例のないガラス産地への道を選び、由水氏に創業とその後の管理運営を委託したのである。

三 新製品の開発 — 耐熱耀変ガラス —

御存じの通りガラスには、ソーダガラス、鉛クリスタルガラス、ホウケイ酸ガラス(耐熱ガラス)などの種類があり、また金、銅、コバルトなどの金属を加えれば、着色することも可能である。これらの製造技術を基盤として、同社は最近画期的な新製品を開発した。コクのある色合いと渋い輝きを合わせた持ち、一〇〇〜一五〇℃の高温にも耐えうる「耐熱耀変ガラス」である。「耀変」とは「火を加えること」によって発現するひかり、輝きのことというが、通常は着色できない耐熱ガラスを熱のかけ方を調整したり、再加熱したり、急冷したりして耀変を産み出すことに成功したのである。「わび」「さび」を尊ぶため華やかな光沢をもつガラスとは割合



耐熱耀変ガラスカップ

緑の薄かった茶道で使われても充分にその務めを果せる製品であり、広い用途を持つ高級品として

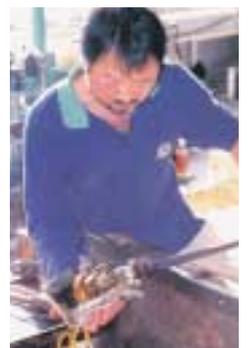
今後の成長が期待される。

同社はガラスの製造に加え、後継者育成にも力を入れ「集中公開講座」として、一年コースと一週間の短期コースを開設している。一年コースでは現在八名が研修中である。また、観光客対象の体験制作も実施している。



四 「能登島」と未来を 共有して新たな発展へ

ガラス工房の創業に遅れること九年にして、公立のガラス美術館としては国内唯一である「石川県能登島ガラス美術館」が開館し、続いて「交流市場」も完成して、当初計画されていた施設は一通り出揃った。「美術館」は全体のシンボル役を務め、また広告宣伝機能を担う。「交流市場」は観光施設として賑わい感を創出し、誘客機能と販売機能を果たす。「工房」は全国に通用する一流品を作り「能登島ガラス」の価値を高めて、ブランド価値を確立する。各施設は、それぞれの役割を分担しながらも、相互に関連を持つ一つの有機体として相乗効果を狙いなが



作品制作中の佐野安正常務

ら、全体としてガラス工芸を発展させるという理想的なシナテムが完成した。

同社の課題は、この任務を果すために製品の品質向上と共に、販売チャネルの多様化を図りながら、営業力を強化していくことである。最近、金沢市広坂に開設した「レオン・グラス・ギヤラリー」は、この方針に沿うものである。営業社員も増員したので、この課題も確実に克服されていくことだろう。

「能登島」が栄えれば同社が栄え、同社が栄えれば能登島が栄えるという意味で、同社と「能登島」とは一心同体の関係にある。その意味で同社の未来はまさに前途洋々ということができよう。(お問い合わせ)

有限会社 能登島ガラス工房
〒九二六-〇二二二
七尾市能登島

向田町一三二-一三三
TEL: 〇七六-七七八四-一八〇〇
FAX: 〇七六-七七八四-一三八〇
URL: <http://www1.ocn.ne.jp/~n-glass/>

このコーナーでは石川の「チャレンジ企業」を応援しています。取材を希望される方は最寄りの商工会にお尋ねください。